

安寧



撮影：前川英昭氏

ホームページアドレス <http://www.himeji-gokoku.jp/>

兵庫縣姫路護國神社報
 「安寧」第二十号
 発行所 兵庫縣姫路護國神社
 〒670-0003 姫路市本町一八
 電話 〇七九-三四一〇八九六
 安寧(あんねい)：世の中が穏やかで平和なと

英霊の言乃葉

遺書

海軍少尉 上田兵二 命

昭和二十年四月十六日

沖繩県近海にて戦死

兵庫県揖保郡余部村出身 二十三歳

絶筆 出撃寸前

謹呈

小生いよゝ 出撃突入す

遺品送り方頼みし故

すぐ着く事と存じます

電替も送り返す様お頼み致しました

遺品喜んでお受け取り下さい

公電が有れば赤飯で祝つてくれ

乱筆にて

昭和二十年四月二日

海軍一等飛行兵曹

上田兵二

(靖国神社社務所)
 平成三十年四月拝殿・社頭掲示



平成三十年度 春季慰霊大祭 齋行

(五月二日午前十時三十分)

緑豊かな境内で恒例の祭典が斎行され約六百名が参列した。

ご遺族、崇敬奉賛会をはじめ、国会議員、県会議員、市会議員、町長、町議会議長有志、兵庫県神社庁からは善見副庁長が参列した。受付は早朝から姫路郷友会隊友会の方々が奉仕された。

定刻通り号鼓、齋館玄関から宮司以下祭司、大祭委



員長代行迎山正明氏、三宅知行崇敬奉賛会会長、兵庫県神社庁善見壽男副庁長、兵庫県遺族会柿原啓志会長以下特別参列者が、関西雅楽松風会による雅楽の奏でられる中、本殿に向かって参進した。本殿に拝礼後、姫路市民合唱団先導により、国歌斉唱され、修祓に続いて海川山野の神饌が供えられた。また、淡交会西播磨支部幹事長をはじめ、支部有志により心を込めて点てられた抹茶とお菓子が本殿に運ばれ、神職の手によつて外陣内に供えられた。静寂の中、泉和慶宮司が英霊感謝の祝詞を奏上した。祭文は、大祭委員長、崇敬奉賛会会長が奏上、神賑行事の、福田賀徳陽、北村鯉杏、富士原浩山各氏により、詩舞「護國の英霊に捧ぐ」、続いて姫路市民合唱団の「朧月夜」「故郷」の歌が神前で合唱された。そののち順次玉串を奉奠し、御霊の平安を祈った。宮司は祭典終了後「当護國神社のご祭神には姫路藩で勤皇の志士として活躍された河合惣兵衛命をはじめ八柱、生野義拳等で亡くなられた郷土の方々、仲井万太郎の命をはじめ十三柱併せて二十一柱の明治維新の功労者がいらつしやること。明治以降命を賭して国づくりに励まれた方々、その御霊にどうこたえていくか新緑の鮮やかなこの杜の中で明治維新百五十年の節目に改めて思考する務めがある」と挨拶した。

崇敬奉賛会 安泰祈願祭並びに総会開催

晴天に恵まれた四月十六日、兵庫縣姫路護國神社崇敬奉賛会、安泰祈願祭並びに会員総会が開催された。本殿において、安泰祈願祭を行われ、三宅会長を始め役員が共に拝礼、会長が代表して玉串を奉奠された。その後、会場を参集殿に移し、深田真史運営委員の



司会によつて総会が開催された。国歌斉唱に続き、崇敬奉賛会副会長迎山氏による開会宣言が行われ、議事に入った。会則に従い、三宅会長が議長に選任され、二十九年度の事業及び会計報告が三木運営委員長から、そして監査報告を本庄監事によつて報告され、全会一致で承認された。引き続き、三十年度事業計画及び予算案が審議、可決され、本年の議事も滞りなく執り行われた。休憩をはさみ、司会を阿比野運営委員に代り、直会が開かれた。釜谷常任理事の発声による乾杯の後、賑やかに会は進み、それぞれが抱負を述べたり、また、ご鎮座八十周年に向けて、崇敬奉賛会の団結と活性化を誓い、最後は、三枝常任理事の閉会の言葉を持つて盛況の内に会を終えることができた。

(文責 崇敬奉賛会理事 戸井田真太郎)

第八回 戦士の証言

「アコーディオンで戦友に捧ぐ」

講師 田中唯介氏



アコーディオンを弾き、唄い、語る田中さん（撮影：松村信彦氏）

七月一日、第八回「戦士の証言」講演会を開催。高砂市在住の田中唯介さん（九十二歳）がアコーディオンと歌でシベリアでの抑留体験を語った。

田中さんは昭和二十年二月、舞鶴重砲兵連隊（当時、中部第七一部隊）に入隊。その後、満州に渡り、野戦高射砲第八大隊（第八六〇部隊）に所属し、測距兵として製鉄所（昭和製鋼所）のある鞍山の防空にあたりついていた。

高射砲は十八門あり、上空でクラスター爆弾のよう

に破裂し、無数の破片を撒き散らし撃墜するもので、田中さんの測距の正確さが最も重要であった。ある日、部隊長の「撃て」との号令で一斉射撃。大きな炸裂音の後、墜ちてくる一つB29が見えたという。幾度かの防空戦で、田中さんの部隊はB29を計十四機撃墜したと語った。

現地では戦勝ムードに包まれ、万歳とともに日本酒や赤飯、鯛などがふるまわれた。ところが、八月九日にソ連が侵攻し、田中さんの部隊は奉天へ移駐。十六日に武装放棄することになった。

九月下旬、奉天から列車に乗せられ北へと進み、黒竜江を渡りソ連のブラゴエチンスクに着いた。先に貨車がずらつと並んでおり、マンドリン銃を持ったソ連兵が一つの貨車に五十人の日本人を詰め込み、扉に鍵をかけた。貨車には窒息しないための天井窓と囲いのない簡単なトイレがあるだけで、何ともやりきれない日々が続いたという。

ようやく列車が止まったとき、海が見え、最初は日本海だと思った。しかし、水をすくい口にすると塩辛くなかったため、バイカル湖とわかった。戦友達は落胆し、その場に崩れ落ちた。

さらに西へとひた走り、十一月にカザフ・ソビエト社会主義共和国（現在、カザフスタン共和国）のカラガンダに着いた。現地では飢えと寒さと重労働が待っていた。田中さん自身二十キロも痩せ、時には力エルのやバッタなどを食べて命をつないだ。冬はマイナス四十度、夏は四十度と温度差が八十度もあり、寒さと暑さに耐えながら、早く日本へ帰りたいという思いが強かったという。「毎日、生きることが死ぬことより辛かった」と抑留の過酷さを語った。そんな日々が続く中、「歌でも歌おうじゃないか」と合唱隊を作り、日本の唱歌や童謡を収容所の中で歌った。

そんな中、悲しい事件も起こった。帰国を目前にし、田中さんらはナホトカに移動。土木作業をしていたあ

る日、雨が降ってきたので、山のふもとに逃げ込んだ。すると、「ゴーツ」という音とともに山が崩れ、四人の戦友が埋まってしまった。生き埋めになった戦友の手を力いっぱい引つ張り、助け出そうとしたが、田中さんの腕が脱臼してしまうほどであった。亡くなった仲間顔は無念の形相であった。

昭和二十四年十一月、四年間の抑留がようやく終わり、「高砂丸」で舞鶴港に降り立った。田中さんは包帯で手を吊っていたため、看護婦に支えられてタクシーを降り、再び日本の土を踏むことができた。そして、実家のある播磨町（当時、阿閉村）にたどり着いた。田中さんが玄関の戸を叩くと、開けて出てきたのは母親であった。母親は「よう帰ってきてくれた」と足にすがり、泣き崩れた。

その後、田中さんは楽器店で生計を立てながら、抑留中ベルリンフィルハーモニー管弦楽団の団員に教えてもらった曲を思い出し、演歌風にアレンジしたのが「まぶたの棧橋 舞鶴よ」であった。現在、復元された引揚棧橋の手前にその歌碑が建立されている。また、引揚友の会の結成を全国に呼びかけ、引揚記念館の建設にも尽力した。

講演の最後には、田中さんのご息で靖剛さんのギター演奏が加わり、「星影のワルツ」など四曲を披露。さらに、参加者からのリクエストで、「異国の丘」、「海ゆかば」を合唱した。



「引揚棧橋」手前にある田中さんの歌碑（撮影：深田）



8月15日 英霊感謝祭 英霊顕彰の集い

挨拶する泉宮司

平成最後の終戦の日となった八月十五日は、曇り空で時折雨が降る日だった。午前十時、太鼓の音と共に英霊感謝祭がはじまり、陸上自衛隊姫路駐屯地司令をはじめ多くの方が参列した。泉宮司が祝詞を奏上し、巫女による「みたまなごめの舞」が奉納された。そのあと、三木英一奉賛会運営委員長の拝礼に合わせ、参拝者一同英霊に感謝と尊崇の念を捧げた。正午前には、陸上自衛隊姫路駐屯地から、ラッパ隊の皆さんが「国の鎮め」を奉奏。その後、正午にあわせて境内にいる参列者で黙祷を捧げた。泉宮司は「八月十五日は慰霊顕彰の日です。慰霊とは、今の平和を御英霊に奉告申し上げ感謝することです。顕彰とは公に奉仕されたことを称えることです。」と挨拶された。

この「称える」ということが近年、誤解されているよ

うに思える。称えると、「戦争賛美だ」と言われる場合がある。

「戦争」とは、そもそも悲惨であり残酷であるのは、古今東西、国を問わず当たり前のことだ。「戦争」そのものを賛美している人などいないと思う。

崇敬奉賛会では、悲惨で残酷で血みどろの中に、先人達の勇気や涙や思いやりがある所に注目し、そんな現実を多くの人に知ってもらい、英霊の御心に触れる機会を作ろうと「英霊顕彰の集い」を毎年行っている。

子供さんにも大東亜戦争を知ってもらう為に、スクリーンにイラストを投影し紙芝居形式で物語が進む「お父さんへの千羽鶴」をはじめ、英霊が子供や兄弟や家族に残した手紙を奉賛会員が朗読し、散華された先人達がどういった気持ちだったかを、共に感じた。

また今年も、特集として「沖縄戦」を取り上げた。沖縄は大東亜戦争において唯一、地上戦が行われた場所である。



島田叡知事の説明をする深田真史氏

沖縄県民を巻き込んだ地上戦だったため、県民に多くの被害が出た話は、よくクローズアップされるが、当時の行政の職員や学生達を含む県民が軍に協力し一丸となって、沖縄を守ろうとした姿はあまり語られない。戦時下においても、民間人がいる限り行政は行われる。その行政で活躍されたのが兵庫県民であるなら、是非知っておきたい、神戸市須磨村出身の島田叡沖縄県知事だ。彼がどのくらい活躍したかを、崇敬奉賛会理事であり加西市議会議員の深田真史氏が解説を行った。直接行政に携わっている深田氏の解説は説得力があり、参加者からは「島田叡さん



ラッパの奉奏と敬礼する陸・海・空の自衛官

のことを知れてよかった」という声が多く寄せられた。また、当時の新聞記事など貴重な資料も展示され、参加者は熱心に閲覧していた。

続いて、米軍に占領されてしまった沖縄の飛行場に切り込み作戦を行った「義烈空挺隊」の物語を三村恵さんの朗読によって行った。

沖縄の人達を助けたい一心で、陸軍の上層部から反対されつつも、彼らの情熱が最終的に「うん」と言わせた作戦。自分たちのことは勘定に入らず、沖縄で苦しんでいる人達のことだけを考えて、笑顔で飛び立っていった隊員達。こんな英霊達の優しさや情熱を多くの人に知ってもらいたいと思う。



義烈空挺隊の朗読をする三村恵氏



沖縄民謡グループ「エイミーズ」

また沖縄民謡グループの「エイミーズ」が、沖縄民謡を演奏してくれた。リーダーの高尾恵美子さんは、沖縄県那覇市出身で「沖縄県のことを多くの人に知ってもらえて嬉しい」と語った。沖縄民謡というのは、昔から沖縄の日常と一緒にあり、現在も生活の一部として存在している。

沖縄の人達が沖縄を大事にしている証拠でもある。

今回、沖縄戦を特集するにあたり、沖縄護國神社の加治宮司をはじめ、職員の皆様が多大な協力をして下さった。沖縄護國神社には、兵庫県のご英霊を含む、沖縄戦で戦った軍人軍属や、島田叡氏のように、行政で活躍された民間人も合祀されている。沖縄護國神社は、奥武山（おおのやま）公園内にあり、公園内には島田叡沖縄県知事の顕彰碑もあるので、もしこれをお読みの方が、沖縄を訪れる機会があれば、是非、参拝してほしいと願う。

文責 崇敬奉賛会常任理事 前川英昭
撮影 松村信彦氏

記念大祭概要と 事業の進捗状況報告

明治維新百五十年ご創祀百二十五年ご鎮座八十年記念事業は、本年三月の総代会及び四月の崇敬奉賛会総会で決議承認され、募金活動に入りました。総代会を構成する但馬播磨地域の遺族会は、ご高齢の方々が多くなりご苦勞をなさっていますが、役員様を中心に熱心に募金活動を展開されています。一方奉賛会では常任理事、理事の方々の精力的な募財活動により、現時点で百万円ご奉賛の高額寄付者が十件を超えました。併せて九月二日現在で別表の通り目標額のほぼ半分以上上っています。

記念事業の中心であります十一月二日の記念大祭



現場のお祓い

三日の明治維新百五十年祭の詳細が決定されました。十一月二日のご創祀百二十五年ご鎮座八十年記念秋季慰霊大祭は、例年の大祭通り十時三十分から齋行致します。今祭典には、宗家（磯部賀堂師）が靖國神社及び兵庫縣姫路護國神社の祭神のお一柱として祀られている吟道賀堂流の門人の方々四十名が詩吟を奉納されます。午後からは陸上自衛隊姫路駐屯地の方々の銃剣道演武、また第三師団音楽隊の演奏などが奉納されます。翌三日の明治維新百五十年祭は十一時より齋行し、午後からは数学者で、「国家の品格」の著作があるお茶の水女子大学名誉教授 藤原正彦氏の「明治の精神」と題した講演が予定されています。

近年は姫路への観光の方々もお立ち寄りになります。少し神社で佇んでご祭神の事へ思いを馳せたり、神社の樹木で季節を感じたり鳥のさえずりに耳を傾け、静かな心で日本の伝統文化を感じる場所として、東屋を含む憩いゾーンを建立する記念工事を進めています。



建設中の東屋（手前）・休憩所（奥）

神社は特別史跡内にあるため埋蔵文化財保護、景観保護の観点から工事は文化庁の承認が必要ですが八月中旬にすべての工事が許可されました。八月一日総代、崇敬奉賛会役員有志参列の基、起工奉告祭を齋行致しました。

参集殿二階の手すり増設や、赤ちゃんのオムツ替設備を中心にした手直し、また、雨の多い時期になりまして砂利が公道に流れ出て、不便をおかけしてまいりました。

た鳥居前の砂利道は九月初旬に石畳を敷設、完成いたしました。毎日参拝される方々から歩きやすくなったとお聞き致して居ります。

昭和天皇様の御製が記載されております正面駒札は大祭を目指して修理予定であります。

また、神社建立当初に下白銀町泉平吉氏からのご奉納があり、八十年を経て一部壊れておりました石燈籠は、奉納者の子孫泉平一氏のご協賛で修理中であります。拝殿前の鈴の緒及び大鈴は、平成十六年に家島町坊勢の小林正明氏からのご奉納でしたが、十五年を経て再び同氏からご協賛をいただき取り換えの予定であります。



新設された鳥居前の石畳

募金現況 (9月2日現在)

	目標	現況
崇敬奉賛会	2,500万	1,386万
管内遺族会	2,500万	910万
合計	5,000万	2,296万

(円)

シリーズ 英霊の戦場(十一)

ビルマで戦い抜いた

姫路の野戦砲兵第五十四連隊

* 現国名はミャンマーですがビルマで統一します。

* 〇の数字は地図の地名番号

通常、砲兵は大隊、時には中隊単位で歩兵部隊に配属されて戦闘するため、連隊として纏まった戦闘記録はない。今回のシリーズは奇跡的に生還された砲兵第二大隊長杉本正六少佐の手記を基本に、多くの戦友及び部下を亡くした砲兵の戦場を紹介。

ビルマへ
野砲第五十四連隊を隷下にした第五十四師団(秘匿名「兵」(つゝもの))は昭和十八年二月姫路で編成され直ちに動員が下令された。国力が損耗した為、兵員・装備も通常師団の三分の二の軽師団であった。

連隊の特徴は兵員一六七五名に対して馬一二七四頭。大隊は三箇中隊と大隊段列(弾薬運搬部隊)兵員五二〇名、馬四一二頭、火砲二二門(各中隊四門)。

この時点でビルマの防衛に任ずる日本軍は僅か、四箇師団の為、内地から三箇師団が急遽増派が計画されたが、船舶の不足と制空・制海権を失いつつある状況下、天候の悪化や夜間を利用して強行輸送を実施しても師団の完全輸送には半年も掛かった。各船は積載量を越える状態の為、将兵の居住は積荷の隙間であった。積荷の石炭から出火した軍需品満載の船が海没する悲劇も生じた。ベトナムのサイゴン(現ホーチミン市)港からは鉄道でタイのバンコック経由で(映画「戦場に掛ける橋」で有名な泰緬鉄道は未開通であった為)マレーシアのペナン港へ。ここからも強行輸送が計画され、陸海軍航空隊の掩護で無事ラングーン港(現ヤンゴン市)に着岸。以後敵の頻繁な空爆を避けながらトラックでタンガッブ①へ、この港からは大発動艇と小発動艇で、マングローブ林の海岸線を隠蔽しつつ目的

地のアキヤブ②(現シッドウエイ)へ輸送した。尚一頭を越える軍馬の輸送状況については記述が無いアキヤブ海岸線を防衛

アキヤブ島は内陸部への主要水路であるカラダン河口を扼する位置③にあるが防衛に扼るべき地形も無い島で、昭和十九年から海岸に掘っても直ぐ埋まる陣地を構築、貧弱な補給活動では弾薬以外の要求は無理で将兵は乏しい食糧の下、敵が上陸すれば水際で玉砕するしかない陣地をひたすら構築し続けた。

同年四月、印緬国境からカラダン河沿いに南下する敵の西アフリカ第八十二師団を木庭支隊(歩兵第一百一連隊長)が印緬国境外に駆逐した。

同年十月、再攻撃して来た敵師団を、楠木流戦術を得意とした桜井少将の奇策で約二カ月遅滞させた。この間、二大隊は歩兵第一百一連隊(新連隊長矢木大佐)主力と共にミョーホン④で防衛任務に就いていた。然し敵の編隊空爆による大量の爆弾投下及び地上部隊への頻繁な空中補給は物量の差を見せつけた。

昭和二十年一月二日、敵はアキヤブ島に上陸した。防衛に就いていた三百名の歩兵大隊に撤退命令が届かず、砲兵支援の救出作戦が実施されたが僅か五十名の将兵のみが救出されるといふ失態が生じた。

アラカンの護り

一月二十二日、ミョーホンからの撤退を支援するため日没直後、掩護射撃を十分間実施、敵陣地が混乱状態の間一砲車を六頭の輓(引)馬で牽く行軍が始まった。マングローブ

の水路は門橋(二隻の船を横に繋いで床材で固定)の手漕ぎで進んだ。野砲の宿命は重い砲と弾薬を人馬で運搬する為、撤退行動は苦難の連続



駄馬砲兵
軽易に分解・結合出来る山砲等は数頭の馬に載せて、どのような地形へも運搬した。

であった。ミエホン⑤からカンゴ⑥への撤退は補給基地(弾薬・糧食)が物品を後送する間もなく敵手に落ちた。執拗な敵の空爆を回避しつつ交通の要衝であるタマンド⑦に到着した。

タマンドを制する
五八二高地の死闘
インパール作戦

の失敗は派遣された一大隊一中隊の全滅が知らされて事の重大さを悟る。敵の侵攻を砲撃で阻止すべく山頂に砲列を敷き、山麓には速射砲部隊を配置して態勢を整えた。英印軍はタ



輓馬砲兵
6頭の馬で牽引している10榴(口径10cmの榴弾砲)砲車。登り坂になると砲兵も協力して牽引。

マンドの南、ルイワ⑧に一箇師団強が上陸し、三月五日艦砲射撃支援の下、戦車を伴った兵員と物量に優る敵の攻撃を受けた。山頂を一旦奪取されたが逆襲で奪還した。その際火砲を破壊され、包囲下での脱出不可能な火砲を処分し、二門を失う。歩兵戦力の少ない守備隊は工兵・架橋兵等からも兵員を抽出し、歩兵化して応戦した。敵の執拗な攻撃を撃退し、師団の態勢立て直しに貢献した。然し、その結果、多くの兵員を失うことになった。以後二大隊は少ない兵員で野砲を馬に分解積載したり、砲車を引かせたりして苦難の陣地移動を開始。英印軍の猛追を阻止すべくアン近くのレモ⑨で包囲撃滅する作戦が今一步のところでも成功する機会を逸した事は、多くの弾薬を消費した野砲としても痛恨の極みであった。

イラワジ河の渡河

アラカン山脈を横断する野砲部隊の苦悩は人馬を励まし合いながら、常に強行軍を強いられた。敵の砲撃やビルマの反乱軍等の襲撃で多くの人馬を失い、撤退速度の足枷であった十榴を処分し、野砲連隊は五箇中隊が各山砲一門、二箇中隊は各迫撃砲一門となる悲

惨な行軍であった。然し火砲あつての野砲部隊の誇りを失ふことはなかつた。幸い小型民船を取得し、火砲を分解して載せ、馬は船側を泳がせたが、其の内何頭かは濁流に飲まれて流されていった。五月二日プロム⑩からの渡河に辛うじて成功。

魔のペグー山系横断

第五十四師団はポーカン⑩で所属部隊を掌握、砲兵連隊も全部隊が揃つたが戦力は山砲四門迫撃砲二門だけであつた。敵の攻撃を撃退した後、雨期に入った行軍は悲惨の一語に尽きる。コレラ・マラリアが発生し、竹林に覆われた山野は食料として筒しかなく、然も村人の少ない食料まで調達するなど飢餓との闘いの上、重い装備品を泥濘化したジャングルの獣道を人馬で搬送するしかなかつた。特に砲兵は行軍速度を維持できず、途中で山砲や弾薬を遺棄せざるを得なかつた。「火砲の無い砲兵は追求するに及ばず」との辛辣な上級司令部の言葉に、死力を尽くした将兵から撤退する軍の惨めさを克服するには「戦闘気力を失わないように」を皆で励まし合つた。

日本軍のシタン河渡河作戦は地獄の中で戦つていたとしか表現出来ない。その様相を英印軍司令官の戦後回想録で、日本軍の悲惨な実相を想像されたい。

「豊富な補給力を保持した我が軍も雨期の泥濘に苦戦した。敗走する日本兵の死体を到る所で発見し、その数は六千体を越えた。シタン河渡河の作戦計画を押し、偵察活動を強化。渡河点に小部隊を配置して渡渉する日本軍を狙撃し、多くの日本兵が斃れて流されて行つた。それでも輸送力も無く満足な武器も無い疲労困憊した将兵が多く渡河に成功したことは驚嘆に値する。」

渡河後、友軍陣地に着いたとの安堵感から体力気力が回復しないまま、多くの兵士が自決や餓死する惨状が生じた。大隊は將兵で互いに緊張感を保持させ、一人の死者も出さなかつた。

八月二十五日終戦を知らされた。師団の武装解除時全武器を奇麗に手入れして引き渡した際、立会した英軍將兵はその数量の少なさに驚いた。砲兵連隊は軽迫

撃砲一門のみであつた。

忠馬の話

これは砲兵掩護の歩兵が実際に見た感動の光景談。昭和二十年七月、ペグー山系は馬にとつても飼料は笹の葉ばかりで軍馬は痩せ細り分解した山砲を運搬する体力が無かつた。そこで行動を共にした兵士が『お前はよく頑張つた。これから自分の力で生きてくれ』と馬を柵の中に残して出発した。兵士の姿が見えなくなつた時、馬は柵を壊してヨロヨロしながらも必死で兵士に追いつき離れることなく従つて行く、その姿を見た多くの兵士は難行軍中であつたが、忠馬に見習おうと敢闘精神を確認しあつた。尚、この馬と兵士のその後は確認されていない。終戦時、大隊に四一二頭いた軍馬は一頭のみが生還した。

野砲第五十四連隊の損耗

総員一六七五名 戦死一二三七名
生還者四三三八名

姫路護國神社に祀られているご英霊 二五二柱

英霊の代弁として

国民に遺して置く真情

人命は何よりも尊い、悲惨な戦争は絶対避けなければならぬ。反戦の図書や高言論がマスコミで盛んである。反戦に就いての異論は無い。然し、終戦後の変革が余りにも急であつた為、一部の政治家や進歩的と称する論者が混乱を好機に、戦争の責任を意図的に戦士に迄負わせてしまつた。遺された遺族への冷たい仕打ちに祖国の為に命を捧げた忠霊は草葉の陰で、海底の岩場で悲憤の姿で泣いている。

忠君愛国や滅私奉公は罪悪かの様に教育され、靖国神社参拝する閣僚をニユースにして国民から遠ざける運動が活発で、慰霊する事は戦争を賛美する事と同一視

ビルマにおける野砲兵第54連隊第2大隊戦闘行動経過図 (現ミャンマー西南部)



させ、神道は宗教として政教分離を盾に政治家が本質を忘れてる。今日の平和は英霊の血潮によつて得られた事を忘れないで頂きたい。

平成十一年五月 元陸軍少佐 杉本正六

出典 防衛省戦史叢書(英国公刊戦史含む)

ビルマ 著者 杉本正六

ビルマ戦線体験記 著者 高橋康明

(文責 崇敬奉賛会常任理事 曾田孝一郎)

日誌抄

三十年四月

三十年九月

- 平成三十年 四月 十六日 崇敬奉賛会総会
- 四月 十七日 姫路市遺族会総会参加
- 四月 十八日 宮司神社本庁出向 役員会
- 四月 十九日 姫路調停協会総会出向
- 四月 二十日 兵庫県隊友会姫路支部 総会
- 四月 二十一日 近畿神社庁連絡会出向
- 五月 二日 春季大祭執行
- 五月 六日 神戸護國神社例祭宮司歌幣使出向
- 五月 十日 兵庫県神社庁役員会
- 五月 十一日 兵庫県神社庁姫路支部定例会
- 五月 十一日 賀室流碑清掃奉仕
- 五月 十四日 兵庫県神社庁姫路支部由緒祭
- 五月 十五日 兵庫県神社庁支部総会
- 五月 十八日 兵庫県郷友会総会
- 五月 十八日 姫路郷友会総会
- 五月 二十日 神戸町慰霊祭、日本会議 宮司講座
- 五月 二十日 賀室流碑清掃奉仕
- 六月 四日 西宮支部総代会出向
- 六月 六日 阿比野建設創立六十周年（泉権禮宣）出向
- 六月 八日 神宮評議員会
- 六月 十一日 兵庫県敬智の会出向
- 六月 十二日 神道青年会近畿地区総会出向
- 六月 十九日 宝塚総代会出向
- 六月 二十日 広島市遺族会正式参拝
- 六月 二十日 佐用石井地区慰霊祭
- 六月 三十日 大祓式
- 七月 七日 「戦士の証言」崇敬奉賛会開催
- 七月 七日 日本会議講座
- 七月 八日 宍粟市波磨町慰霊祭・毛利権禮宣 大年神社夏祭出向
- 七月 九日 JCI国際アカデミー成功祈願祭
- 七月 十日 JCI国際アカデミー良文化体験プログラム 境内
- 七月 十日 津川神社例祭出向
- 七月 十日 神社庁同協議会出向
- 七月 十日 日本会議兵庫総会出向
- 七月 十日 神社総代会総会
- 七月 十日 神社庁協議委員会出向
- 七月 十九日 神社本庁役員会出向
- 七月 二十日 賀室流碑清掃奉仕
- 七月 二十日 神社総代会
- 七月 二十一日 近畿護國神社会出向
- 八月 一日 境内整備事業起工奉告祭並 樹木抜採清祓式
- 八月 四日 英霊にごたふる会参拝
- 八月 七日 初任神職研修会出向
- 八月 八日 城業老人会清掃奉仕
- 八月 九日 西播・東播現任神職研修会
- 八月 十一日 前高司泉 慶雄 大命五十年祭 英霊感謝祭
- 八月 十五日 調停協会正副会長会
- 八月 十五日 賀室流碑清掃奉仕
- 八月 十六日 但馬地区現任神職研修会
- 八月 十六日 石川県加藤市長祝賀会
- 八月 二十一日 神社庁役員会
- 八月 二十一日 賀室流碑清掃奉仕
- 九月 二日 淡文会青年部茶会・次報後四十名団体参拝
- 九月 十日 兵庫県神社関係者大会出向
- 九月 十日 兵庫県神社庁姫路支部抜擢祭
- 九月 十日 スロフトーナ線日開帳
- 九月 十四日 全国護國神社（靖國神社）伊勢神宮大祭旗布祭・行状会
- 九月 二十日 神社庁役員会
- 九月 二十日 国連「書道揮毫イベント」

記念大祭参列のご案内

ご創祀百二十五年ご鎮座八十年・明治維新百五十年

明治維新百五十年

平成三十年十一月二日(金)

午前十時三十分

秋季慰霊大祭

(ご創祀百二十五年・ご鎮座八十年)

祭典齋行 午前十時三十分～正午

午後一時 陸上自衛隊

銃剣道演武奉納

第三師団音楽隊奉納演奏

平成三十年十一月三日(土・祝)

午前十一時

明治維新百五十年祭

祭典齋行 午前十一時～正午

午後一時～午後二時三十分

数学者・お茶の水女子大学名誉教授

藤原正彦氏

講演「明治の精神」

参集殿一階では隊友会姫路支部によりまして旧軍第十師団の歴史顕彰展示があります

臨時奉仕者募集のお知らせ

誠実で明るい方お待ちしております

【募集資格】

十八歳～二十五歳未婚の女性

※高校生不可

※髪の毛の染色不可

※男性の方も若干名募集しております

年末一日間以上、一月一・二・三日に奉仕頂ける方
たくさん奉仕頂ける方を優先し採用致します。

【奉仕期間】

〈七五三〉十一月中の土・日・祝日

〈年末〉十二月二十五日～二十八日

午前九時～午後五時

〈大晦日〉十二月三十一日

午後十一時～午前九時 ※二十歳以上

〈年始〉一月一日～一月十日

午前八時～午後八時 ※うち八時間交代制

【奉仕内容】

〈七五三〉ご祈禱受付・奉仕

〈年末・年始〉清掃、迎春準備、お守り、おみくじ授与

【申込み方法】

メールにて名前・住所・電話番号・年齢・通話可能な時間帯(午後五時まで)を明記の上、左記メールアドレスまでお送りください。こちらからご連絡致します。

gokoku.miko@gmail.com

【申込み締切】

十一月月上旬まで随時募集

※定員に達し次第終了

